

令和7年度 第2回花巻城跡調査保存検討委員会

日時 令和8年1月20日(火) 午後2時00分

場所 石鳥谷生涯学習会館 3階 大会議室

次 第

1 開 会

2 あいさつ

3 協 議

- (1) 令和7年度 花巻城本丸跡内容確認調査の結果について
- (2) 松川家住宅拡張工事に伴う緊急発掘調査の実施状況について
- (3) 令和8年度 花巻城本丸跡内容確認調査の実施計画について

4 そ の 他

5 閉 会

配 布 資 料

- 資料 No.1 花巻城跡調査保存検討委員会 委員名簿
- 資料 No.2 花巻城跡調査保存検討委員会 設置要綱
- 資料 No.3 令和7年度 花巻城本丸跡内容確認調査の結果について
- 資料 No.4 松川家住宅拡張工事に伴う緊急発掘調査の実施状況について
- 資料 No.5 令和8年度 花巻城本丸跡内容確認調査の実施計画について

花巻城跡調査保存検討委員会名簿

氏 名	所 属 等	備 考
高 橋 信 雄	前花巻市博物館長	
関 豊	二戸歴史民俗資料館長	
熊 谷 常 正	盛岡大学名誉教授	
室 野 秀 文	花巻市総合文化財センター文化財専門官 (前盛岡市教育委員会歴史文化課文化財副主幹)	
中 村 良 幸	花巻市文化財保護審議会委員、花巻市博物館長	

任期：令和6年4月1日から令和8年3月31日まで

○花巻城跡調査保存検討委員会設置要綱

平成27年 6 月 19日教育委員会告示第 4 号

改正

平成28年 3 月 24日教委告示第 5 号

令和 6 年 3 月 8 日教委告示第 1 号

花巻城跡調査保存検討委員会設置要綱

(設置)

第 1 条 花巻城跡の調査及び保存等に関し、専門家による検討を行うため、花巻城跡調査保存検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事項)

第 2 条 委員会の所掌事項は、次のとおりとする。

- (1) 花巻城跡の現状と課題に関する事項
- (2) 花巻城跡に現存する花巻城に関連する建造物及び遺構等の評価に関する事項
- (3) 花巻城跡調査保存のあり方に関する事項
- (4) その他必要と認める事項

2 委員会において行われた検討の内容は、教育長に報告し、「（仮称）花巻城跡保存計画」の策定及び花巻城跡調査保存に関する事業の参考とする。

(組織)

第 3 条 委員会は、委員 5 人以内をもって組織する。

2 委員は、次の各号に掲げる者のうちから教育委員会が委嘱する。

- (1) 考古学及び城館研究に精通する者
- (2) 花巻市文化財保護審議会委員で花巻市文化財保護審議会会長から推薦された者

3 委員の任期は、2 年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第 4 条 委員会に委員長及び副委員長各 1 人を置き、委員の互選により定める。

2 委員長は、会務を総理し、会議の議長となる。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第 5 条 委員会は、教育委員会が招集する。

2 委員長は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、説明を求め、又は意見を聴くことができる。

(庶務)

第6条 委員会の庶務は、教育委員会教育部文化財課において処理する。

(補則)

第7条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。

附 則

この告示は、告示の日から施行する。

附 則 (平成28年3月24日教委告示第5号)

この告示は、平成28年4月1日から施行する。

附 則 (令和6年3月8日教委告示第1号)

この告示は、告示の日から施行する。

令和 7 年度 花巻城本丸跡内容確認調査の結果について

I 調査概要

調査場所 花巻市城内 1、4、8（鳥谷ヶ崎公園）
 調査期間 令和 7 年 5 月 19 日（月）～令和 7 年 11 月 27 日（木）
 調査面積 752 m²

II 調査地点と目的

調査地点 御台所前御門枡形とその周辺
 調査目的 ①御台所前御門の遺構検出
 ②枡形の形状および規模の確認
 ③枡形内の石垣残存状況の確認
 ④枡形東西の土塁調査

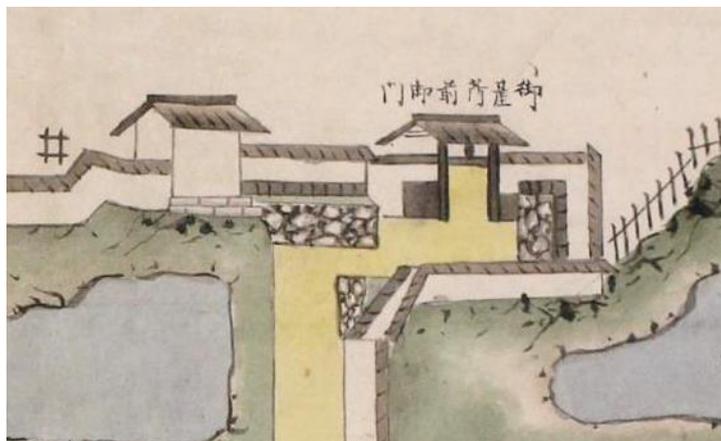
III 調査結果**1. 御台所前御門跡の位置と構造について（付図 1、写真図版 3）**

二ノ丸から土橋を渡って枡形に入り、右手に折れて東へ進み、突き当りを左に折れた先に、東西の石垣と土塁に挟まれた御台所前御門跡の坪地業が確認された。

坪地業は 4 基検出された。東側の支柱とみられる坪地業を [P 1]、西側を [P 2] と命名した。両者はいずれも直径約 170 センチメートルの円形平面を持ち、本丸御殿跡の坪地業よりも大きな構造を示している。これらの坪地業は、内部に多量の礫を詰め込む構造で、本丸御殿や西御門の事例とも共通する。また、[P 1] と [P 2] の間隔は、芯々で約 3.2 メートルに位置している。

さらに、[P 1] の北側においてやや小ぶりの坪地業が発見され、これを [P 3] と命名した。[P 3] は直径約 130 センチメートルの円形平面を持ち、[P 1] との間隔は芯々で約 1.8 メートルを測る。この位置関係から、[P 3] は控柱の坪地業である可能性が高いと考えられる。一方で、[P 2] の北側には明確な坪地業は確認できなかったが、礫が散在する範囲が検出され、この部分を [P 4] と命名した。ここでは、遺構検出面付近にまで最近のゴミが入っていたことから、攪乱されていると考えられる。なお、[P 4] の中央に南北トレンチを設定して掘り下げを行ったところ、トレンチ断面に土坑とみられる掘り込みが確認された。

これらの発掘結果と現存する絵図面とを照合すると、御台所前御門は支柱一对、控柱一对の礎石建ちの薬医門であると考えられる。



もりおか歴史文化館所蔵『花巻御城廓図』より

2. 石垣構築の範囲（付図1、写真図版1）

現状の石垣は根石列ともう一段程度が残るのみである。しかし、裏込石の分布や石垣抜き取り溝の範囲から、枡形内部全体に石垣が巡っていたことが確認された。石垣は御台所前御門の内側（本丸御殿側）まで延びていた。

枡形の東辺と南辺は南東で直角の入隅を成し、北辺と西辺は北西で入隅を形成しており、後者は約110度の鈍角である。

石垣の高さは裏込石の分布から推定でき、南辺・北辺は土塁頂部まで、東辺・西辺は土塁高さの約3分の2程度まで積まれていたと考えられる。枡形全体としては同一の高さに揃えられており、地表面からの高さはおおむね1.2mに達していたとみられる。

3. 石垣構築の特徴（写真図版4～8）

【枡形南辺石垣】（写真7・8）

枡形南辺土塁の裾部分で、野面石の石垣を確認した。調査区内では最も保存状態が良く、東西方向の長さは7m30cmを測る。一方で、枡形の入口付近では築石がほぼ失われ、抜き取り痕が溝状に検出された。裏込石の分布状況からみて、土塁の頂部まで石垣が積まれていたと考えられる。土塁の高さは1m20cm程度である。

《室野委員指導（現地説明会資料より）》

径50～70cmの比較的大ぶりの野面石を、2m余りの間隔をあけて設置して、その間に径30～40cmの小ぶりの野面石を、小面（こづら：石材の小さな面）を表面として、石の控えを長く取り、隙間なく並べている。石列は残りの良いところでは2段分認められる。石材を隙間なく並べて横筋を通して積みあげている。東面石垣よりもやや高い面に根石が設置されていることや、石材の用い方からみて、東面石垣よりも新しい時代の石垣と考えられる。江戸時代中期以後に改修（積み直し）された石垣と考えられる。

【枡形東辺石垣】（写真9・10）

枡形東辺土塁の西面裾部分で、野面石の石垣を確認した。1段目の根石のみが残存している。残存部の南北方向の長さは5m40cmを測る。裏込石の分布状況からみて、土塁の中腹付近まで石垣が積まれていたと考えられる。石垣の高さは、南辺石垣と同じく1m20cm程度とみられる。枡形東辺土塁の北面にも石垣が1～2段残り、こちらの東西方向の長さは4m70cmを測る。

《室野委員指導（現地説明会資料より）》

径70～100cm余の野面石を、横に寝かせるように、間隔をあけて設置し、その間に小ぶりの石材を置いて石垣の根石列を形成している。各石材は石の大面（おおづら：石の広い面）を表面とし、控えが短い形で置かれている。また、南端入隅には、控えを短く、石材を立石にしているのが確認できる。根石に大ぶりの石材の間隔をあけて設置しているのは、その上に、より大きな石材を積んでいたことが考えられる。城門の両側などに大面石を配置し、城門と石垣に威厳を持たせて、入る人々を圧倒する狙いがあったと思われる。いわゆる穴太積石垣であり、豊臣秀吉による奥羽再仕置が行われた天正年間の末（1591～1592）か、それに近い時期の構築と考えられる。

【枡形北辺石垣】（写真 11～14）

裏込石の分布状況から、土塁南面と東面の全体に石垣が積まれていたことが確認された。枡形の内側となる北面については、御台所前御門から西側へ約 3 m まで石垣が積まれていた。土塁の高さは、南面で 1 m20 cm 程度、東面と北面で 1 m 程度である。

石垣は抜き取りが著しく、連続性を欠く部分が多い。南面では花崗閃緑岩の根石が僅かに 1 個残存するのみであり、抜き取り痕が溝状に確認された。その溝内部には裏込石が崩れ落ちている状態だった。

東面では、南端付近に 1 個の根石が検出され、他の部分は抜き取り痕が溝状に残っていた。

御台所前御門を通過した枡形の内側では、土塁北面で 1～2 段の野面積みの石垣が残存していた。この部分での東西方向の長さは 3 m10cm を測る。

また、この北面部石垣の北側には、上幅 20cm・深さ 30cm の溝が検出された。溝の北辺では上端部分に長辺を連ねて配置した石列も確認され、排水の側溝として機能していた可能性が考えられる。

【枡形西辺石垣】（写真 15・16）

入隅から 1m 程度南側で、花崗閃緑岩の割石が検出された。残存する石垣は、僅かにこの 1 個のみである。

裏込石の分布は、枡形北辺と西辺の入隅付近では、北辺と同程度の高さまで確認されている。一方で、枡形入り口付近では残存状況が悪く、石垣の高さを推定するのが困難となっている。しかし、裏込石が枡形入り口付近まで残存していることから、枡形内部全体に石垣が積まれていたことが明らかとなった。

4. 石垣と裏込石、御台所前御門坪地業の石質鑑定結果について（写真図版 12）

実施日 令和 7 年 10 月 27 日(月)

鑑定人 柳澤忠昭先生（花崗岩研究会、元県立高校教諭、元県立博物館勤務）

鑑定方法 柳澤先生が肉眼で石を観察し、石材・産地・時代を鑑定する（非破壊鑑定）

鑑定対象 石垣築石、裏込石、側溝石列、御台所前御門坪地業

【鑑定結果①（石垣築石）】

《産地が北上山系のもの》

花崗閃緑岩、花崗閃緑斑岩、花崗斑岩、細粒花崗閃緑岩、閃緑岩、ホルンフェルス、砂岩ほか

《産地が奥羽山脈のもの》

安山岩、玄武岩、デイサイト、流紋岩、頁岩、礫質砂岩ほか

【鑑定結果②（裏込石）】

《産地が北上山系のもの》

花崗閃緑岩、花崗閃緑斑岩、花崗斑岩、閃緑岩、ホルンフェルス、砂岩、チャート
珪質頁岩、頁岩

《産地が奥羽山脈のもの》

安山岩、安山岩（岩手山）、玄武岩、デイサイト、流紋岩、凝灰岩、頁岩、

【鑑定結果③（御台所前御門坪地業）】

《産地が北上山系のもの》

花崗閃緑斑岩、花崗斑岩、細粒閃緑岩、流紋岩、ホルンフェルス、石英、砂岩、チャート

《産地が奥羽山脈のもの》

安山岩、デイサイト、流紋岩

【柳澤先生による評価】

- ①北上川と豊沢川の氾濫で来た石が混じっていると考えられる。
- ②奥羽山脈と北上山地の石が混じっているが、北上川により運ばれた要素が大きいと考えられる。
- ③稗貫川と北上川との合流点では蛇紋岩が存在する。しかし蛇紋岩は、砕けやすい性質であるため、城の近辺まで流れてこなかったと考えられ、花巻城の石垣の石材に蛇紋岩は選ばれなかったとみられる。
- ④所々に北上山系の花崗閃緑岩がみられる。これらは明らかに川の力で割れたものではない。産地としては土沢方面などが考えられるが、割ったものを遠方から運び込み、石垣の要所に目印的に使用したことも考えられる。



北上山系の花崗閃緑岩(左:柵形北辺石垣南面、右:柵形西辺石垣)

【考察 鑑定結果から見た石材調達の実態について】

野面積の築石、石垣の裏込石、御台所前御門の坪地業に用いられた栗石のいずれにも北上山系と奥羽山脈の両方に由来する石材が含まれることが明らかになった。このことから、石材は城からそれほど遠くない北上川および豊沢川の河畔で調達されたと考えられる。石垣築造の段階では北上川はまだ流路を切り替えておらず、本丸北側直下の河畔からの搬出は比較的容易であったとみられる。

また、築石に含まれる北上山系起源の花崗閃緑岩については、人為的に割られた可能性があるとの重要な指摘があった。これらの石に矢穴は認められないが、荒割りした加工石材であるとも考えられる。これに関連して想起される史料は次のとおりである。

『郷村古実見聞記』（『南部叢書（四）』所収、南部叢書刊行會編）

御城築直し御縄張は彦九郎政直公御代より北松齋勤中のよし。但切石等は五大堂・小山田邊より取候よし。

『内史畧』（岩手史叢第3巻所収、岩手県立図書館編）

花巻御城 御築直し御縄張 彦九郎政直御代より北松齋城代にも有之 但切石等は五大堂 小山田邊より取たると云々

『郷村古実見聞記』は、盛岡藩の著名な数学者であった阿部知義が、古い伝承や藩内の経済資料等を記録したもので、文化元（1804）年の成立である。『内史畧』は盛岡藩士の横川良助の著作で、『盛岡砂子』や『奥南旧指録』など種々の史料を採録・集成したものである。『内史畧』の成立は、引用された『盛岡砂子』が天保4（1833）年以降の編述とされるので、それ以降となる。なお、『内史畧』の上記史料については、『南旧秘事記』の記事を収録したものらしい。

この史料によれば、花巻城の修築は17世紀初頭の北松斎時代や次ぐ南部政直が城主の時期に行われたとあり、石垣に関しては構築時期が明記されず、切石採取地の伝聞を記すのみである。

史料が石切場として示す「五大堂（花巻市石鳥谷町）」と「小山田（花巻市東和町）」は、共に北上川左岸の北上山地西縁部に所在し、北上川支流の添市川で繋がった両隣の地域である。この地域の基盤の岩石は花崗岩であり、巨礫の露頭が



東和町北川目 花崗岩の露頭

所々に見られる。史料のとおりとすれば、五大堂や小山田の石切場から、舟運により添市川と北上川を経由して、花巻城周辺で石材を荷下ろししていたのかもしれない。また、東和町落合の落合2区I遺跡の発掘調査で、矢穴を持つ花崗岩が出土しており、花巻城の石垣構築との関連が指摘されてきた。このことは、花巻城石垣の石材調達が五大堂や小山田に限定されず、広範な地域から行われた可能性を示すものである。

問題は、野面積の石垣の構築と割石の使用の関係である。すなわち、石垣築造当初から野面石と割石が混在していたのか、それとも後世の修理で割石が追加されたのか、今回の調査では確定できなかった。とはいえ、花巻城の石垣に北上山系由来の割石が使用されていたという鑑定結果は、前掲史料に記された伝聞を補強するものである。

5. 枡形の形状と規模（付図1、写真図版1）

御台所前御門枡形は本丸内部に設けられた内枡形である。本丸への経路は二ノ丸から土橋を渡って枡形に入り、突き当たりを右折、さらに左折して御台所前御門を通る。平面寸法は約20m×5mで、ほぼ長方形を呈する。枡形南辺の石垣裾付近から溝跡が検出され、枡形内の排水機能を担っていたと推測される。また、枡形西側の土塁には櫓の存在が考えられ、侵入者に対して横矢を掛けることができる強固な守りを形成していた。

6. 枡形東西両脇の土塁形状と規模（写真図版9）

枡形の東西両脇に接する土塁は高さが2m以上に達し、幅も広く築かれている。南辺・北辺の土塁に比べて1.5倍以上の高さがあり、前掲『花巻御城廓図』には西脇の土塁上に建物が描かれていることから、本来は枡形への侵入に備えた櫓が設けられていたと考えられる。東脇土塁については建物の描写は確認できないが、兵を配置するために幅広く築かれてい

た可能性がある。

【枅形東側土塁】（写真 17）

枅形から東へ続く土塁は、現在の公園の芝生面から見るとそれほど高く見えない。これは公園造成により土塁の根元から中腹までが埋め戻されているためで、実際の高さは2m以上ある。『花巻御城廓図』では土塁頂部に枅形から菱櫓へ向けて木柵が巡らされ、枅形東辺には漆喰塀が描かれているが、調査ではいずれの痕跡も確認できなかった。御台所前御門枅形に接する部分でも、土塁上面に建物の遺構は見られなかった。

令和5年度の調査で本丸御殿側と土塁との間に溝が検出されており、今回の調査でも同様の溝が確認された。溝は排水側溝の機能を持つと推測されるが、御台所前御門付近では形状が不明瞭である。枅形南辺の石垣根元で検出された溝と連続している可能性も考えられたが、今回の調査では明らかにできなかった。

【枅形西側土塁】（写真 18）

枅形西側の土塁は西御門から御台所前御門まで連続しており、今回の調査区に接する箇所では四角錐台状を呈している。現況で測定すると、下底は南北約17m×東西約15m、上底は南北約8m×東西約10m、高さは約2～3.2mである。

土塁東側の法面（枅形西辺部）を調査したところ、本来の上底面の上に約60cmの盛土が施されていることが確認された。東屋の建築により上底部の遺構はかなり損なわれていると考えられるが、盛土の厚さから見ると遺構が予想以上に残存している可能性もある。土塁の構築に関する所見は後述する。

7. 土塁断面から観察される内部構造と構築時期差について（写真図版 10）

【調査の趣旨と方法】

枅形内で西辺石垣と北辺石垣が入隅となる箇所は、切通し道路により破壊されている。ここを利用して、土塁の構築技法や構築の時期差など内部構造を確認した。具体的には、枅形西辺の法面から表土を除去し、土塁本体の構築土を露出させる方法を採用している。この箇所の調査は平成16年度にも行われ（以下「前回調査」）、報告書に土塁側面図が掲載されている。今回は、これまでの本丸内容確認調査の知見を踏まえ、改めて確認を行ったものである。

【花巻城時代の土塁】（写真 19）

土塁は褐色シルト、褐色砂礫土、黒色土などの大きな塊を無造作に盛った構造である。本丸御殿側の整地層の上に土塁構築土が載っていることから、御殿部分の整地と土塁の築造が一体的に行われた土木工事であった可能性が高い。大量の土砂の供給源は堀の掘削土であったと考えられる。

また、土塁構築土の直上から石垣の裏込石が検出された。裏込石と土塁の間に旧表土層は認められないため、枅形の整備や石垣の築造も同一の一連の土木工事に含まれると考えられるのが自然であろう。なお、今回の調査では土塁から遺物は出土しなかった。

【花巻城に先行すると推測される版築土塀】（写真 20）

花巻城時代の土塁内部に、構築手法がまったく異なる部分を確認した。前回調査ではここを版築状と把握している。立ち上がりは壁面に類似した様相を示し、暗褐色土や黒褐色土が数センチメートル単位で薄く重ねられ、非常に緻密に締まっている。今回の調査では、前回のトレンチを復元し、さらに部分的な拡張と深掘りを行った。

その結果、この版築状部分は中世以前の堆積層である黒色シルト層の上面を整地・盛土した上に構築されていることが確認された。花巻城時代の土塁が土を無造作に盛り上げて一気に築かれているのに対し、ここに見られる丹念な土の積み重ねは著しく異なる。構築技法からみて、花巻城に先行する版築の土塀とみなすのが妥当であろう。

松井道圓『和賀稗貫郷村志』（享保 11 年・1726 年）によれば、本丸にはかつて瑞興寺があり、築城の際に現在地へ移転したと伝えられている。この伝承を採れば、瑞興寺にあった版築土塀を転用して花巻城の土塁が構築された可能性が想定される。なお、今回確認された版築土塀は切通し道路の西側法面でのみ認められ、東側法面では確認されていない。

8. 出土遺物の概要（写真図版 11・12）

本調査で出土した遺物の大半は、土塁を被覆する表土および盛土層に由来するものである。これらの盛土には比較的近年の生活廃棄物が多く含まれており、少なくとも盛土層が造成期以降に本丸内で攪乱があったことを示している。

公園造成の年代推定は、出土した廃棄物の内容に基づいてある程度可能である。盛土中から不二家「アンパンマンチョコレート」の小袋が検出され、袋面に印刷されたキャラクターはアニメ化後の「アンパンマン」であった。アニメ放送開始は昭和 63（1988）年、同商品の発売開始は不二家の公表によれば平成元（1989）年である（※）ことから、公園造成に伴う本丸の改変は少なくとも平成元年以降に行われたことが窺われる。さらに飲料缶のプルタブやガラス瓶片等が多数混入していることは、削平による搬入だけでなく、城外から運び込まれた客土が一定量含まれている可能性を示している。



盛土に含まれているゴミ

以上の結果から、出土遺物の大半は攪乱された造成土層に由来し、原位置を保持していないことが明らかとなった。他方で、遺物群の構成は従来に本丸御殿跡で確認された出土物と特段の相違を示さないことから、これらは本丸御殿に関連する遺物であると判断して差し支えないと考えられる。確実に遺構に伴うと認められる遺物は、御台所前御門 P1 の集石中から出土した僅少の瓦破片に限られる。以下、種類別に出土遺物の概要を述べる。

（※）不二家の歴史 <https://www.fujiya-peko.co.jp/company/about/history/history03/>

【陶器】（写真 21）

中世の遺物は、美濃産の志野の菊皿が出土した。年代は 16 世紀末で、長石釉を施している。近世は、美濃産の播鉢、肥前産の鉢、大堀相馬産の皿・瓶、在地産の碗・皿・播鉢など

がある。肥前産の鉢は、令和5年度の本丸御殿台所跡で出土したものと接合するものがあった。このことは、前述した本丸御殿側の削平土を枡形側に盛ったとの推測を裏付ける。

【磁器】(写真 22)

中国産青花碗の小破片(16世紀、明代)が1点ある。最も多いのは肥前産で、17世紀末以降(大橋編年IV期)の大量生産流通の製品である。内容は、染付碗・皿・水滴、青磁皿が出土している。また、19世紀後半の瀬戸産の染付碗が出土している。

【瓦】(写真 23)

今回発掘された瓦は、ほとんどが燻し瓦で、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦が確認された。令和5年度に続き、向鶴文を持つ軒丸瓦が1点出土しており、盛岡城の調査で17世紀中葉から後葉のものとする「筆羽双鶴文」をもつものである。本丸跡では2例目、花巻城全体では3例目の出土である。

また、御台所前御門跡の坪地業P1から赤瓦の軒平瓦1点が出土している。本瓦葺の瓦である。この瓦が近世の遺物であれば、花巻城での赤瓦出土として初例である。ただし、この瓦当文様は盛岡城でも類例が確認できておらず、今後類例を調査し、後世に混入した可能性も含めて検討を加えることとする。

【古銭】(写真 24)

古銭は8点出土し、全て寛永通寶である。時期の判明するものは、鑄造年が寛永13(1636)年頃とみられる古寛永が2点、寛文8(1668)年～元文5(1740)年頃の鑄造とみられる新寛永が5点ある。

【和釘】(写真 25)

和釘は約207点出土した。頭部形状が正方形のものと長方形のもの2種類がある。これらは本丸御殿等の解体時に部材から抜き取られたものと考えられ、そのため大半が曲がっているか、途中で折れた状態となっている。

9. 発掘調査後の復旧方法と復旧後の状況について(写真 27～29)

前回の検討委員会での意見を踏まえ、発掘終了後は調査前の状態に近づけた復旧を行った。その際、遺跡の保護と将来的な再度調査実施を念頭に、裏込石と石垣にネットを張り、次期調査の標識とした上で埋め戻しを実施した。復旧の手順は次のとおりである。

【枡形平坦部の復旧】

- ・遺構面を山砂で保護し、その上に発掘調査で生じた掘削土と碎石で盛土を実施。
 - ① 遺構面に砂を2cm程度の厚さで敷き均し(ただし坪地業は厚めに盛って保護)。
 - ② 山砂の上に発掘の掘削土を戻し、被覆後に転圧機や小型重機で転圧。
 - ③ 公園散策路との接続部周辺は高低差があるため、枡形から段差無く盛土を施工。
 - ④ 最後に碎石を5cm程度の厚さで均一に敷き均し、管理用車両の通行を可能とした。

【土塁部分の復旧】

- ・石垣と裏込石を繊維ネットで覆い崩落を防ぐ。その上に発掘掘削土を盛り、客土を吹付。
 - ① 繊維ネットはビニール製で劣化しないので、裏込石を再確認する際の標識として適当。
 - ② 盛土作業の終了後、土塁の法面に客土吹付を行い、緑化により遺構の崩壊を防ぐ。
 - ③ 客土には多年草種子を混ぜて吹付し、厚さは1 cm以上とした。冬期間の降雪や凍結で流出しないように施工。

IV まとめ

花巻城御台所前御門跡は、二ノ丸から土橋を渡り枳形内に入って右折・左折した先、本丸御殿に面した位置に東西の石垣に挟まれて検出された。門跡では坪地業4基が確認され、主柱と推定されるP1・P2はそれぞれ直径約170センチ、控柱と考えられるP3は約130センチで、P1とP2の芯間は約3.2メートル、P1とP3は約1.8メートル測る。P2北側のP4は攪乱を受けた痕跡を示し、トレンチ断面では土坑状の掘り込みが認められた。これらの配置・寸法関係や絵図面から、薬医門形式の礎石建ちの門であった可能性が高いと総合的に推定される。

枳形の平面は概ね東西約20メートル、南北約5メートルで、周辺には高さが地表から約1.2メートルに達する石垣が巡る。枳形内には石垣の脇に排水溝とみられる掘り込みが確認された。枳形土塁の断面からは、花巻城期と考えられる無造作な盛土層と、それに先行する版築層が併存しており、構築に時期差があったことを示唆している。

石垣の残存状況は必ずしも良好ではなかったが、野面積みの石垣が確認され、花巻城の築城当初に遡る穴太衆による構築と推定された。花巻城のその後の変遷については、明治6年に城内の建物や樹木、武具類が入札によって民間に払い下げとなり、石垣の積石も取り外され払い下げられている。発掘調査で確認された石垣の状態は、廃城後の花巻城がどのように変化したかを示す貴重な証拠であり、その歴史的な意義は大きいと言えよう。

石垣の石材は、北上山系由来と奥羽山脈由来とが混在し、河川に運ばれた石と人為的に割られた割石の両方が見られる。

出土遺物は中世から近世にかけての陶磁器片、燻し瓦・赤瓦片、寛永通宝、和釘類などである。ただし、攪乱を示す市販菓子袋等の混入も確認されたことから、原位置を留めるものはほとんど無いと考えられる。

発掘後の保存対策として、露出した遺構の保護を目的に裏込石上にネットを設置し、掘削土および山砂、碎石での埋め戻しによる復旧を行っている。



【写真1】令和7年度調査区 空中写真（北西から）



【写真2】令和7年度調査区 直上空中写真（写真上が北）



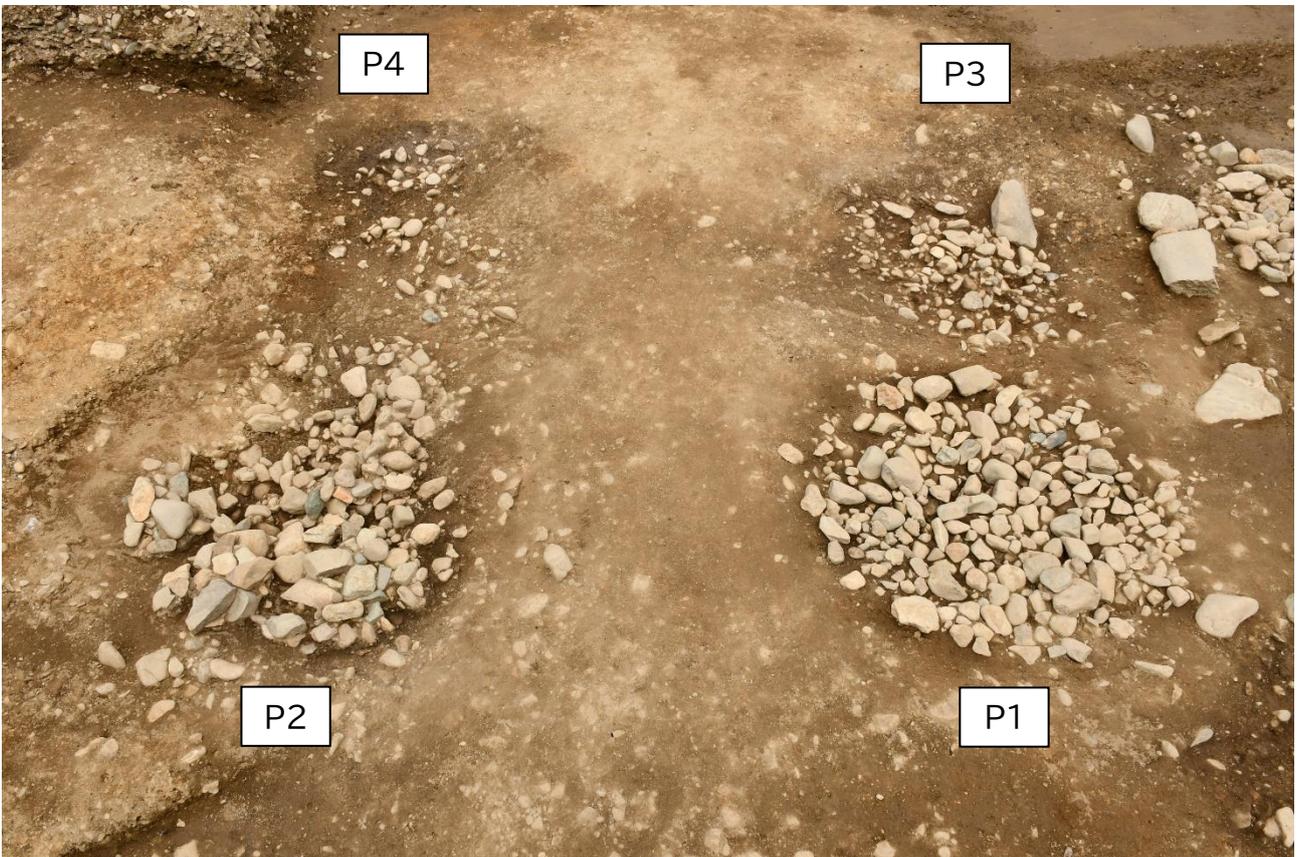
【写真3】表土・盛土除去作業状況（西から）



【写真4】表土除去後、崩落裏込石・盛土混入礫 検出状況（北から）



【写真5】御台所前御門跡 全景（北から）



【写真6】御台所前御門跡 全景（南から）



【写真7】 枡形南辺石垣と裏込石（北から）



【写真8】 枡形南辺石垣と裏込石（北東から）



【写真 9】 柵形東辺石垣と裏込石 [西面] (西から)



【写真 10】 柵形東辺石垣と裏込石 [北面] (北から)



【写真 11】 枡形北辺石垣と裏込石 [南面] (南から)



【写真 12】 枡形北辺石垣と裏込石 [東面] (東から)



【写真 13】 柘形北辺石垣と裏込石 [北面] (北から)



【写真 14】 柘形北辺土塁 北裏 溝断面 (東から)



【写真 15】 柘形西辺石垣と裏込石（東から）



【写真 16】 柘形西辺土塁 北裏 溝断面（東から）



【写真 17】 柘形東側土塁全景（北西から）



【写真 18】 柘形西側土塁全景（東から）



【写真 19】 柘形西辺土塁断面（東から）



【写真 20】 柘形西辺土塁内 旧期版築土塼断面（東から）



【写真 21】
出土陶器



【写真 22】
出土磁器



【写真 23】
出土瓦



【写真 24】
出土古銭
(寛永通寶)



【写真 25】
出土和釘



【写真 26】
石質鑑定実施



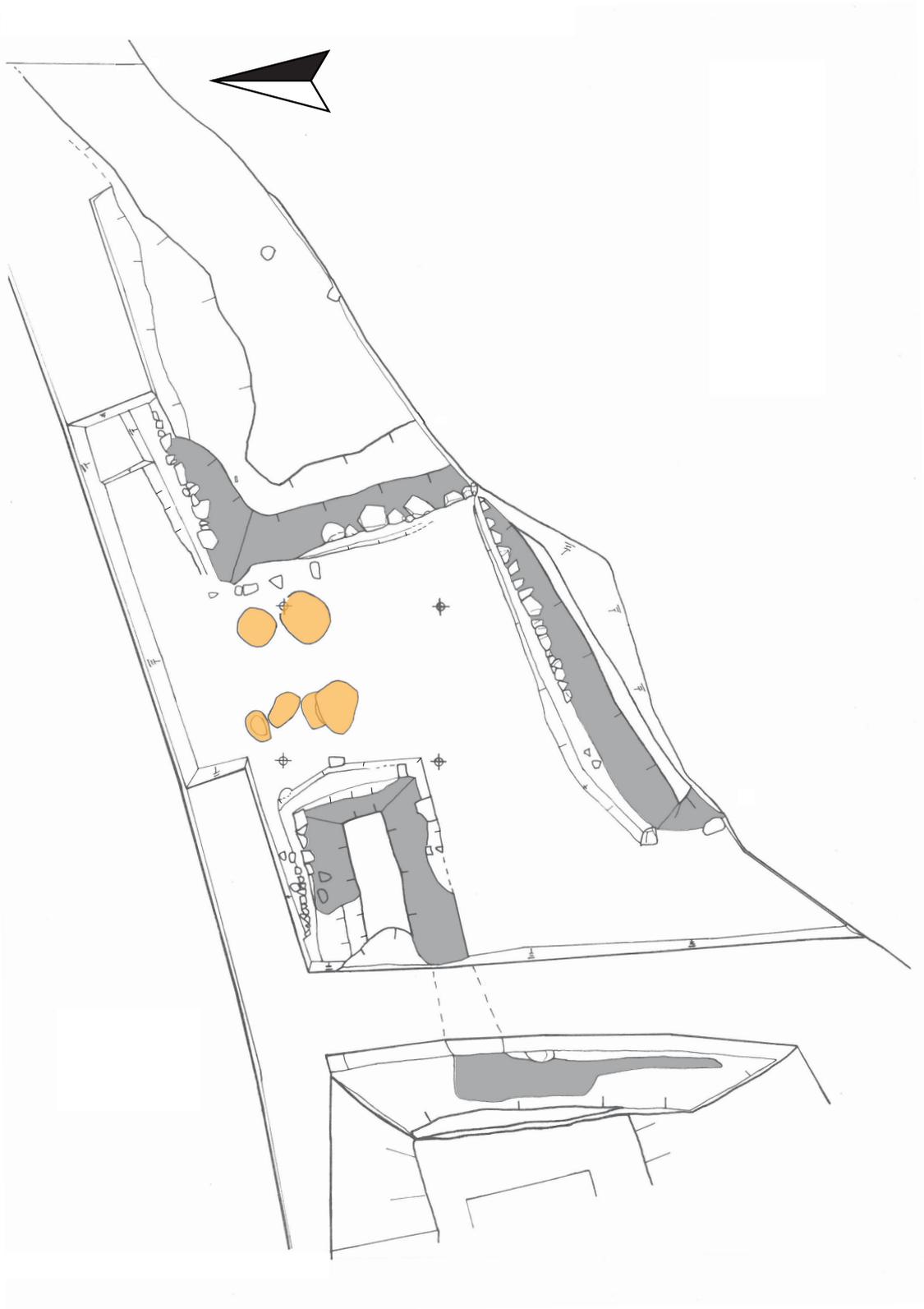
【写真 27】
復旧業務
ネット施工状況
(西から)



【写真 28】
復旧業務
埋め戻し・転圧
(北東から)



【写真 29】
復旧完了状況
客土吹付
碎石敷き均し
(西から)



裏込石分布範囲
台所門跡

0 5 10m
1:200

付図1 令和7年度 御台所前御門跡周辺 遺構配置図

